

第6章

浅子の歴史と文化財



浅子の位置

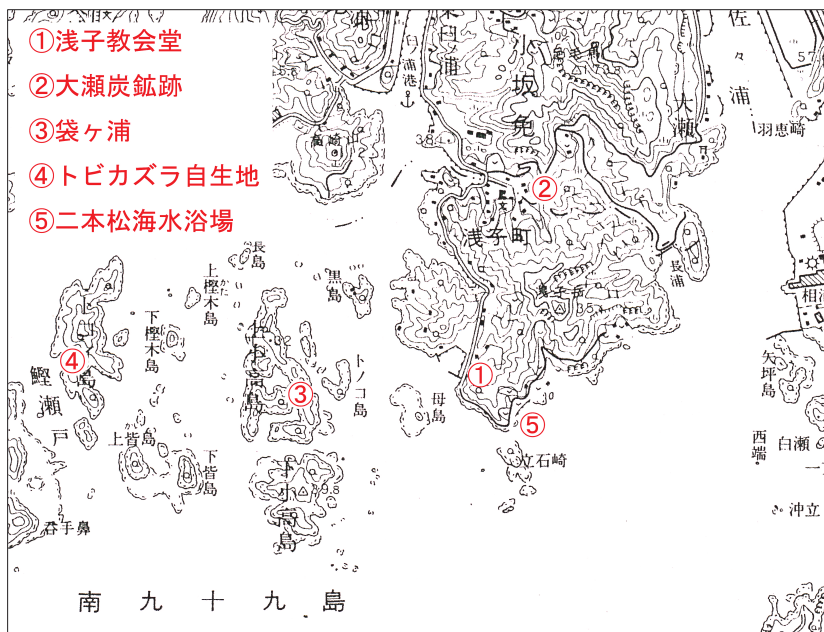
この地域の小中学校

小中学校: 浅子小中学校

第6章 浅子の歴史と文化財

飛び地・浅子

浅子や小佐々町は、佐世保市の一部ですが、陸路で行くには佐々町を通らなければなりません。このような土地は「飛び地」と呼ばれ、浅子の場合は、江戸時代に相浦の一部であったのが、そのまま引き継がれて佐世保市の一部になったものです。



浅子の地図

なぜ「飛び地」となったのか？

浅子と相浦の間には、佐々川河口から広がる海があります。この海を挟んだ両側の土地が相浦であれば、その海の貝や魚、海草を採る権利が独占できることから、飛び地が生まれたと考えられています。

浅子がいつ飛び地となったのかははっきりしていませんが、江戸時代の1699年(元禄12)に、山口村(相浦の旧名)を構成する集落に浅子や高島とありますので、少なくとも、江戸時代の早い時期から飛び地であり、すでに人が住んでいたことがわかります。しかし、もっと古い縄文時代の遺跡などは、今のところ発見されていません。

浅子の地形

浅子の東は佐々川の河口に沿い、西は白ノ浦湾、南は九十九島の海が広がり、北側のみ陸につながった半島になっています。半島の外に通じる道路は一本しかありません。江戸時代には山道しかありませんでしたが、それは海からの連絡が主だったからです。1968年(昭和43)に道路ができてバスも通うようになるまでは、給食のパンをはじめ、生活に必要なもののほとんどは船で運ばれていました。

地形を見てみると、半島中央の浅子岳(標高135メートル)から続く山が海岸までせまり、目立った川もありません。民家は入り江だった所を埋め立てた狭い平地か、斜面に建っています。海岸部の二本松や立石崎には美しい砂浜もあり、夏になると、海水浴を楽しむ人々で賑わいます。

また、現在無人島となっている上小高島や下小高島、トコイ島などの南九十九島の一部も浅子に含まれていて、これらの島にまだ人が住んでいた頃は、専用の通学船もありました。



通学船「あさなぎ丸」

カトリック信者の移住

浅子の人口が増えるのは、明治時代になってからです。江戸時代の農民や漁民などその土地にいる人は、特別なことが無ければ移住することは許されていませんでした。それが、明治時代になって人の移動が自由になり、カトリック信仰の島である黒島から、多くの人たちが移住してきたのです。

黒島には、1800年頃に西彼杵半島の外海などから移住した、潜伏キリシタンたちが暮らしていました(第10章黒島参照)。多くの人たちで狭い土地を分け合っていたため、生活は大変貧しかったのです。そのため、より良い生活の地を求めて島から出たのです。



浅子教会の洗礼名簿によると、1883年(明治16)に梶ノ浦地区に2家族、その後1886年(明治19)に3家族が移ってきて、1897年(明治30)までに15家族に増えていきます。現在では浅子地区に住む人の約80パーセントがカトリック信者です。

←浅子教会

コラム～出口家の移住～

二本松に住む出口繁松さんの父親が浅子にきたのは、1889年（明治22）で6歳のときであったという。そのときにカトリック信者は6家族となった。出口家の先祖は、三重（現長崎市）から黒島に渡り、明治になって田平（平戸市）を経て、浅子に落ちついた。

出口家は、黒島のカトリック復興に尽力した出口大吉につながる家柄でもある。

炭鉱でさらに人口が増える

浅子では、江戸時代から石炭が掘り出されていました。大潟新田を開発した草刈太一左衛門も田谷炭鉱を開いています。

そして、1917年（大正6）に近代炭鉱として梶ノ浦に大瀬炭鉱を開鉱してから、さらに人口が増えました。1918年（大正7）から1925年（大正14）の間に戸数が倍になっているのは、そのためでしょう。

炭鉱の最盛期には多くの商店や映画館まであって、炭鉱で働く人は2,000人もいたそうです。大瀬炭鉱閉山後は臼ノ浦で石炭関係の仕事についている人が多かったようです。しかし、昭和30年代後半から40年頃までに炭鉱は次々に閉山してしまいました。それからは仕事も少なくなり、浅子の人口は、1955年（昭和30）から、1965年（昭和40）までの10年間に、200人以上も減少しています。

現在の浅子の主な産業は漁業です。戸数約134戸のうち漁業を営んでいるのは約42戸です。

浅子の人口のうつりかわり

1918年(大正7)	42戸
1925年(大正14)	83戸
1927年(昭和2)	107戸
1955年(昭和30)	159戸 889人
1965年(昭和40)	137戸 667人
1975年(昭和50)	134戸 613人
1985年(昭和60)	144戸 583人
1995年(平成7)	142戸 531人
2002年(平成14)	154戸 486人
2013年(平成25)	134戸 359人

第6章

浅子教会

地域のなかで、注目されるのはカトリック浅子教会堂です。最初は、梶ノ浦の西谷の民家を教会代わりにしていましたが、1930年（昭和5）に、信者の献金で池ノ谷に現在の教会堂が建設されました。

木造で、玄関部分の2階には楽廊（合唱隊が聖歌を歌う場所）があります。本体は正面に祭壇をもつ平屋で、中央の天井の高い主廊部と、その両側に天井の低い側廊部を配置した「三廊式」と呼ばれる構造です。これは、屋根を支える骨組みを特に頑丈にしたことで実現されています。内部の花弁をかたどった装飾や、祭壇上のステンドグラスも美しく、小さいながらも質の高い教会建築といえます。



教会内部の様子



クリスマス・イブの浅子教会

前にも述べたように、浅子は住民の約80パーセントが信者というカトリックの町です。そのため、毎年クリスマス頃になると教会をはじめ、多くの家々でイルミネーションが飾られて、街は光であふれます。その様子は大変美しく、浅子の冬の風物詩となっています。クリスマス・イブの夜には教会からは賛美歌が聞こえ、たくさんの人が礼拝に訪れて祈りを捧げます。

浅子の島々

浅子地区には、トコイ島や上小高島、下小高島など南九十九島の一部も含まれています。いずれも現在では無人島となっていますが、1960年頃まで人が住んでいました。なかでも上小高島には「袋ヶ浦」と呼ばれる深い入り江を天然の「いけす」に利用した料亭「洗鱗洞」があり、戦前は海軍の将校たちがよく利用し、伏見宮博恭王をはじめとする皇族や俳人の青木月斗も訪れ、句碑を残しています。



戦後間もないころの「洗鱗洞」

※写真提供：西海パールシーセンター

戦後は、アメリカ軍の将校たちの保養所となっていました。当時を知る人たちは、九十九島の美しい海に囲まれた料亭は「竜宮城」のようだった、と語ります。



トビカズラの花

※写真提供：ふるさと自然の会

また、上小高島の正面にあるトコイ島には、かつて砥石用の石切り場がありました。このトコイ島で、2000年（平成12）に大きな発見がありました。九十九島の生物調査を行っていた西海パールシーセンターの調査チームが、トビカズラという植物の自生地を発見したのです。

トビカズラは、これまで国内では熊本県に一株だけ知られていました。これは中国から持ち込まれたもので、国の特別天然記念物に指定されています。

トコイ島のトビカズラは自生としては初の発見で、その最も北の自生地が九十九島であることが分かった、大変貴重な発見です。トビカズラの存在は、九十九島の自然環境が大変良好に保たれている証拠といえるでしょう。

コラム～お墓で調べる地域の歴史～

浅子には2カ所の墓地がある。浅子小中学校の西側にある浦谷墓地は主に仏教徒の墓地で、1839年(天保10)や1862年(文久2)の墓碑銘を持った墓がある。それより古い墓は簡単な石積みであるためいつ頃のものかは分からないが、1700年代以前の墓地であることは確実である。一方、柳浦の柳墓地はカトリック信徒の墓地である。墓碑銘で最も古いのは1890年(明治23)で、こちらの方は移住の歴史とよく符号している。

地域の年表

時 代	出 来 事
江戸時代	
1699年(元禄12)	山口村(相浦)の一部に浅子と高島集落がある。
1818年(文政元)	相浦の斉藤松五郎、大瀬に炭鉱を開く。
近代	
1886年(明治19)	カトリック信徒の徳永、内野、日数谷一家が最初に移り住む。
1905年(明治38)	北松浦郡山口尋常高等小学校浅子分教場が開校する。
1917年(大正6)	住友炭鉱が大瀬炭鉱を開鉱。
1930年(昭和5)	浅子教会竣工。山口村浅子免から相浦町浅子免に変わる。
1938年(昭和13)	大瀬炭鉱閉山。相浦町が佐世保市に合併。佐世保市浅子町となる。
現代	
1947年(昭和22)	佐世保市立浅子小学校となる。
1950年(昭和25)	佐世保市立浅子中学校が併設される。
1968年(昭和43)	道路が完成し、バスが走る。
2000年(平成12)	トコイ島でトビカズラが発見される。